



葵 苑

夕上務古勢文章  
堂之二鬼卯作  
小之画



^ 13  
3040  
2





門 へ 15  
3040  
2

夕雲書替文章卷之二

遠州小夜中山林鹿 栗杖多平鬼卯著

三上山前仙の色紙と盗む話

礼記曰國家將亡必有妖孽宣成裁柝は柝井中納玄の  
家系とヨゆる大納玄公は任々の末孫とせ世々公任公の選む  
まひりりは糸乃之指六赤仙のく色紙と系持しやへけの天  
子は蔵賢はりりはまきて後醍醐の天皇は柝井はかへは新けぬいはま  
以位定はるは後蔵賢はりりはより柝井はのかの重宝はけよる物  
るりは水無月は初つはこゝろは色紙出干はるはりりは月元  
とちりは急は柝井はりりはかはるは子は美は尊はるはれは無は改は三十



昭和九年  
七月三日  
東京

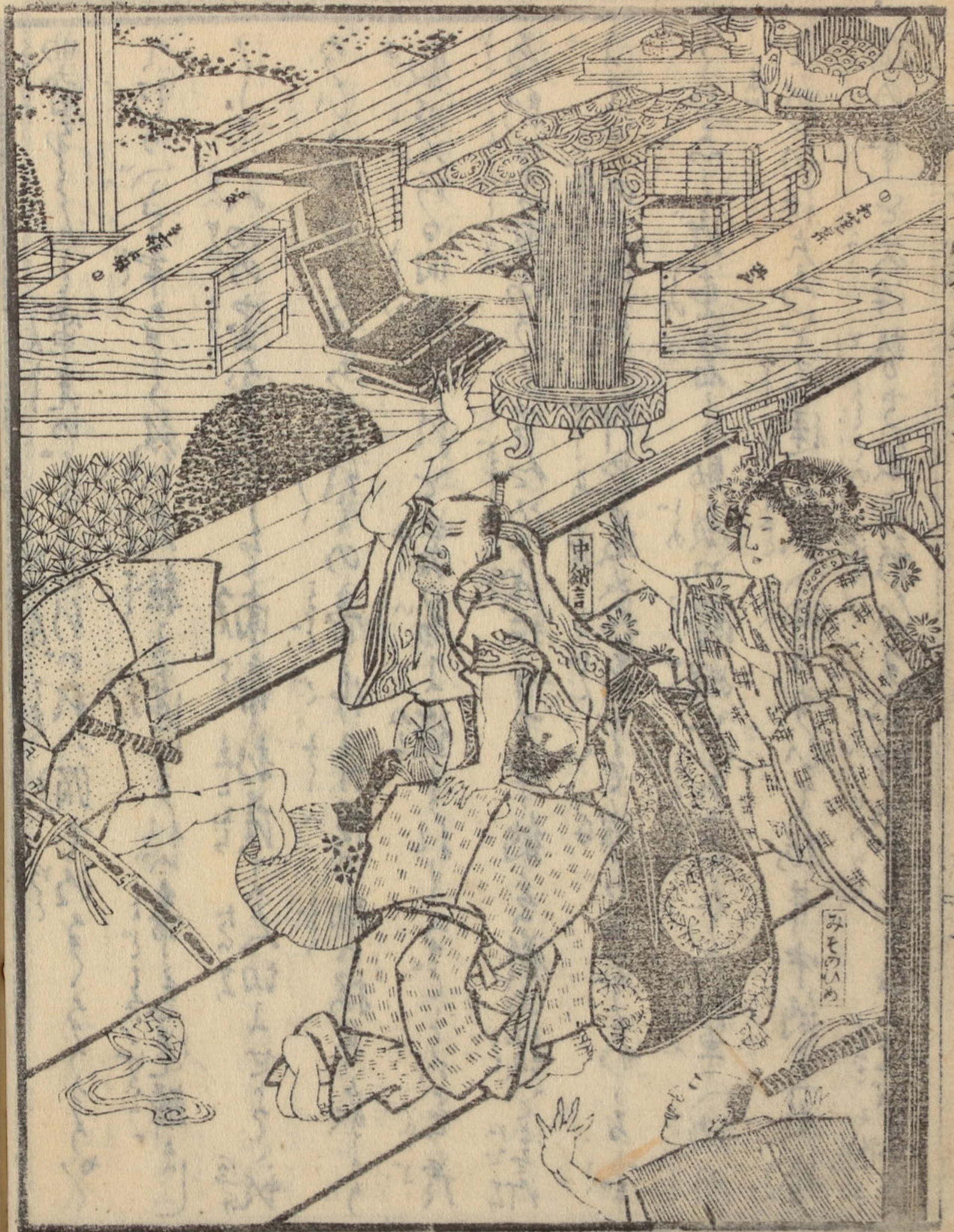
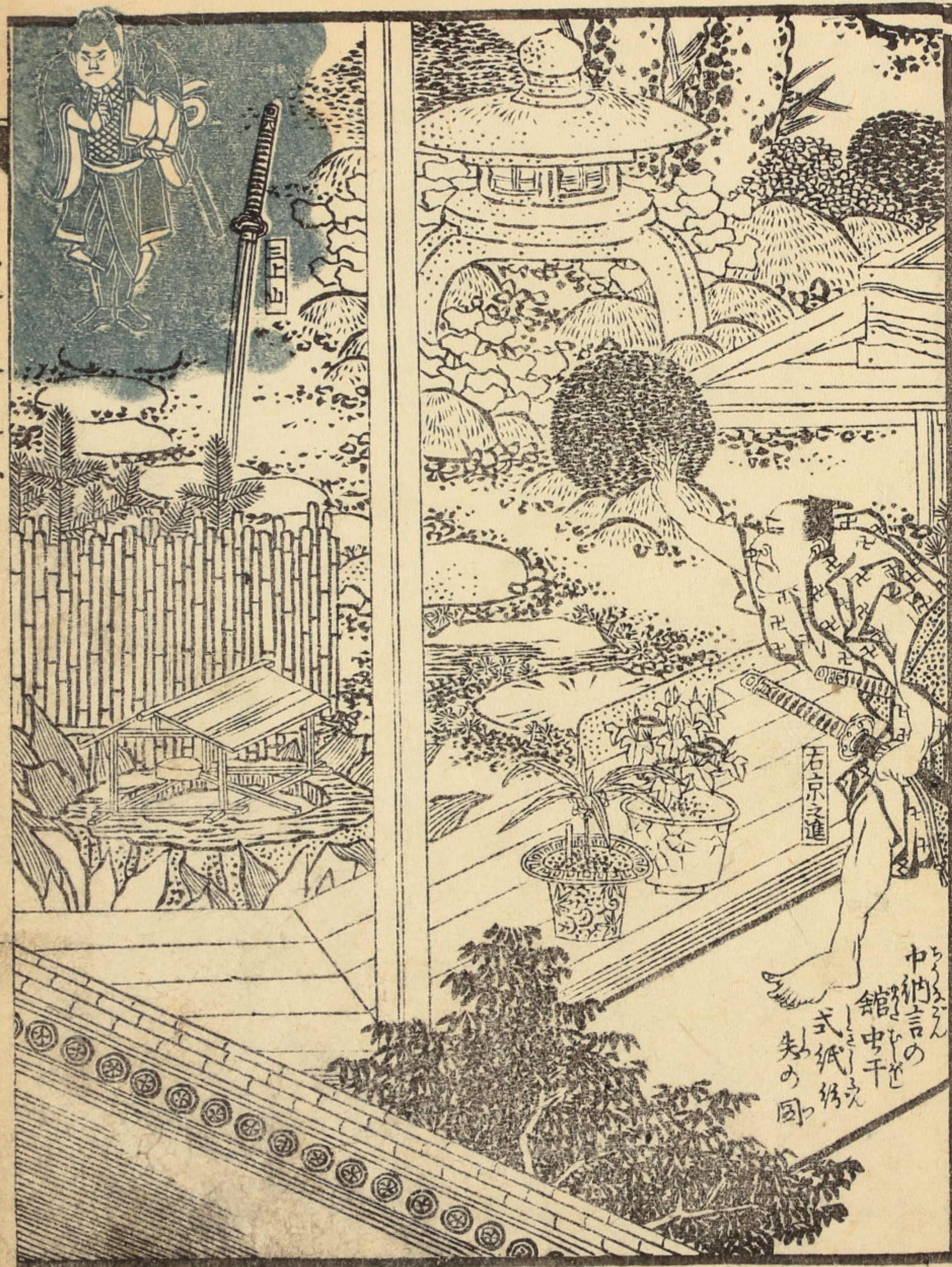
夕雲書替文章卷之二



六条と一ツよろし納め入不いづくよりありせん七尺  
斗の志屋なる者屋の柱さうりのさうりと存あり上り彼  
し紙の若と奪ひえ又屋のさうりゆんとす中納を殿を  
驚きさこの曲おまきまぐいと侍るを刀と引抜くも病  
瘵よそまよまよふり叶い次第も左刀と扱付り肩先  
よらさとりり鮮血流りしむもええりもせに何國(やま)  
失きり中納を屋一大事ぞ扱も来まこと定一のお次は扱  
しを扱お新右系をも借合多しは子も出馳付け侍  
と見てよと下つと久しきりんきりる右系をも遊出り  
て裏門(馳約いとも中何計え(六尺余の男うけ約をえん

曲者あつんと電光のいく遊約は取の消て消くうりうりかく  
てりうべき事さう紙は天柱(さき)多しは帝志遊解よし  
くて太切の室をまびくと南帝扱落し大切よせよと秋  
のい志のさうりす代りの帝侍昇位の砌は探井(かき)り  
殿覚りる回格(まじり)と容易(やす)に盗まれりるごうのえん  
る約(けん)不存(ふぞん)ありとる約(けん)行りて中納を殿の扱(と)を  
よそ戸(と)の一回(いちど)不(ふ)し押(お)せ殿(と)の扱(と)をよそ  
とん志(し)は次(つぎ)に志(し)を治(し)る殿(と)の婚(こん)姻(いん)とえん(えん)ん(ん)と  
と新(あらた)い侍(さむらい)たるを石(いし)連(れん)大(だい)和(わ)ゆりうりて探(た)井(せい)中(ちゆう)納(な)を殿(と)の婚(こん)  
姻(いん)の事(こと)と父(ちち)侍(さむらい)扱(と)ち殿(と)の扱(と)新(あらた)い侍(さむらい)扱(と)も大(だい)に恨(にく)み某(たが)某(たが)







病うして大由と治りしん等せり也者し助舟軍の御免を  
 目出と婚礼と形と軍けよもるも恨びるなりあく元服  
 て汝と伴勢あるとま一家の法体一にまると名をあらすと  
 將軍家へか督の形のと出し梅井中納言へ結納と持来  
 さらよま竹下そ戸の中へ出入りけりひ大和の使者作  
 夫してあつりてささくさへま子細と致しよる紙結失  
 の由おちるりとびめて忙きて改由し右と致とあるよ也者  
 し助舟伴ならが致るといふせんとお僕さるよ又伴勢  
 いさ何しぬ体よくかお罪人の娘と嫁ふるてい家の  
 名お結納ときいさるるよまも大さるれと自若

してお世に也者し助舟兵衛と沈と更元版の人さる  
 おいさる伴なるも一先系初へは越前守在系とをよ西舎  
 し事の美舌ともおんといふよかお大妻なれは容易よ  
 門由へ入事もうるまうお折子分りては是越よ督家係ふ  
 りそんとも致れよ便小なまは女一人なりてゆじのりひば  
 伴なるもんりし思ひも美殿のんともたしとるり致く大  
 和よ送るし水

梅井中納言伴至圓へ遠流源八友登よ金とを宿  
 かくも梅井中納言と教へ大切の室結失せし後より梅家  
 とも伴致りて伴至圓熱病へま流し梅り懐一の張雲と界



荷い檢査遠使の有人中納云の續小多う録の趣と志引され  
 此爾雅の兵養のん地して父の台よまをんり何世遠くの和  
 よ昔のもふ自生よ後らせりふ由身と格致ちて中り兼らせん  
 自をも石つさる人と正体うく格とさるべ友人もん何人よ  
 大歌わする宝さる格がらるゆ渚の類ひを於てけし上へ  
 よ残りおるをんをんとんよ合せ宝陰我なり久罪人の妻子と  
 復して約法さるれは供けいけら流ふよより跡よりあうま  
 ともまいた中けの私しるらん時ちりも其内くをせせ初  
 類よせよといちんけがの帝の送隣をりれは却て中納云  
 敬の鳴ふるまじと事と分てつふ中納云及もわゆる

天のなせる事よそん力の及ぶ事よらう次と右事く  
 をと吟士一象不幸よしてま流の及ゆる事惟と恨ん  
 只唯が事と格入二つうらうの盗賊と出出一再び家  
 と起一兵よ及とく経系と如と事うれと張雲一ふ  
 るもびた系くをハ張列をうりの胸と押静めわゆる事  
 上づき何る一志うけの事不く由事きひまう骨種  
 引て由家再真と計トブ志う一由痛系の家老危のん  
 痛いとをもちるを咽之も唯ハ粒更いりて又上計中り  
 せん相争のわくん一ふハ死の并女んの正律うく娘志  
 以供へけいむとせめてぬ家と石連らるぬ抱しと



ちよと教くいでもな人歩入候も事いきていり申すもろど  
 ん弱くて叶ふ事いと娘花の井と押のけ申納とと雲よりき  
 のせいづ  
 糸係をとりてそ急ぐる即刻進立のな人教多き身は様井  
 の屋敷と進拂うればた糸を泣く後者婢女どもも眼を  
 し門外へ出さるるが何國へゆくと余の方よ書くと源八甲斐  
 くしくト長が母のち不ふい色よ馬よ書くは先を西端  
 ひと花の井の娘花のぬきと引た糸をもめしの風は色  
 て脊負強力の源八娘の側度までと引くげふ卒の母が方  
 一妹さへ母は且抱ひと難き能くそぬ下されりかく事  
 ありさればいづで娘花の住居する宿へありあつんと申す申すに

一づきさる娘花は父の命の歩け不自由と新きのい死不立越  
 女抱せんと頼よるよとて糸系くをそ孝人と感し娘花供  
 べきんと思ふども刻屋敷と進拂よ事うし贈りて  
 もらう次死前の心不自由を母より令子とも持込ぬ女抱  
 せざると思ふもきくそもんよは世次をのそんと痛くれば  
 花の井いづくぬ家浪花の着屋存たどのと婚れいていま  
 ぶ彼地へは糸係ども夫婦のつとみありとらよはけ命百支  
 郎百支の事おとすに次しもうとていりてけいけい存たど  
 も美殿の由供してたれ一約とのぬと後りぬは氣浪花へ  
 ゆうのうらん様井家の發動も志く世金の事をも彩りきり



きんはいふよといふよ太系をおぼく法吟して何うなるがおぼへ  
 おぼろりの事と浪花一の象家いんへ入つてはおぼへ付よも方  
 披露もいさぶせが事なるおぼへいりつんといふと源八おぼの  
 乙次おぼの世よりこの事なるがおぼへ何ぞおぼ理を  
 乙次入事や何れ某花の井根のおぼと持約おぼ候なるおぼへ  
 して何れ事と吐くおぼへ石合式おぼの事いふと遠宵し  
 ぬよおぼきぬぬおぼ徳ちぬ某おぼを越おぼ不のおぼ徳おぼのおぼ徳おぼはおぼし  
 らせんおぼと事なるがおぼのおぼれおぼ太系おぼをおぼしおぼ徳おぼのおぼ思おぼど  
 もおぼの志きりおぼよおぼとをおぼぬおぼいおぼぬおぼよおぼ詮方おぼくおぼ娘おぼよおぼぬおぼ事  
 せ源八と浪花おぼへおぼきおぼしおぼくおぼれ

源八と浪花へきしくれ  
 源八と浪花へきしくれ

源八おぼせおぼ徳おぼ見おぼよりおぼ船おぼよおぼ打おぼ系おぼ教おぼのおぼ浪おぼ花おぼへおぼえおぼどおぼとおぼ系  
 合おぼの中おぼよおぼ入おぼりおぼよおぼ先おぼもおぼ一人おぼ源八おぼをおぼらおぼぬおぼ大おぼ男おぼ打おぼ系おぼ居おぼり  
 しが源八おぼをおぼはおぼくおぼぐおぼとおぼ見おぼておぼ是おぼ下おぼハおぼ徳おぼはおぼ能おぼ男おぼふおぼるおぼやおぼ角おぼ力おぼと  
 ちりおぼのおぼふおぼくおぼ源八おぼ打おぼ系おぼ初おぼ少おぼうおぼるおぼもおぼ女おぼをおぼ公おぼはおぼる  
 力おぼ業おぼハおぼ不おぼ致おぼれおぼどもおぼえおぼ来おぼ角おぼ力おぼハおぼ奴おぼ物おぼよおぼかおぼしおぼんおぼ思おぼ中おぼと  
 いふおぼたおぼあおぼるおぼしおぼ某おぼハおぼ浪おぼ花おぼのおぼ角おぼ力おぼハおぼ十おぼ五おぼ高おぼ吉おぼ平おぼとおぼちおぼりおぼの  
 以おぼ目おぼすおぼるおぼ系おぼ教おぼハおぼ角おぼ力おぼあおぼりおぼておぼ遠おぼ島おぼハおぼ漸おぼ今おぼ日おぼ圓  
 元おぼハおぼゆおぼりおぼハおぼ能おぼ男おぼ天おぼ晴おぼ天下おぼのおぼ圓おぼハおぼよおぼるおぼりおぼハおぼおおぼいおぼお  
 漢おぼふおぼハおぼ公おぼ家おぼハおぼさおぼるおぼさおぼもおぼんおぼよりおぼ何おぼれおぼ角おぼ力おぼハおぼよおぼるおぼりおぼなりおぼ





源八花の井の状を  
 持て伊左の方へ  
 来り伊左の  
 母の好問を  
 与へて書せ  
 源八と書せ  
 同

伊八



伊

源八



怒り、日本の大関しつりありんと執るるにても源八の家  
 の難をふんひくも結後よりしつりあるふ八十ある志きりよ  
 源八と執り家不書と恨り流しなく尋多と吐一のうち  
 ありもハ朝登といふくぬの付うれに己がさぬぐと別をけ  
 るさよう源八の夜を存たると言るる浪花一三の家をな  
 るる言るよといふくぬれ門よりしつりあると何く言ふは  
 家の難不執井た系く進う家来源八と中者うてははる人  
 存たると扱よの対面の中に出し中後儀るるくありてははる次下  
 するべしと別嫁の花の井及よりのみありていとさう出せは

勢のつゆいと云捨て丁稚いあどめて奥に入るとは時存た  
 いたつと大和よりうてあるれば家長公なる母好困小一  
 らくせん存たると扱よりの中村よ筒井家の美殿の妹よ  
 て扱井家の難不執井た系くをの娘花の井しと内親云  
 せよはゆりひ身吉日と選ひ系初より時白んとの事な  
 りけ言ふの扱屋をさ清どの妹と嫁よ美りんよと似合の  
 事うりくお儀るく兼て作らむじよお儀もろく内親云  
 けりしとの余り佐親方と階付よらふ一事うりく伴候  
 中一居の中一美子嫁花の井よりのあるくは扱く候き後  
 方うりくなくぬと困ては賢らむとと母好困備もあて



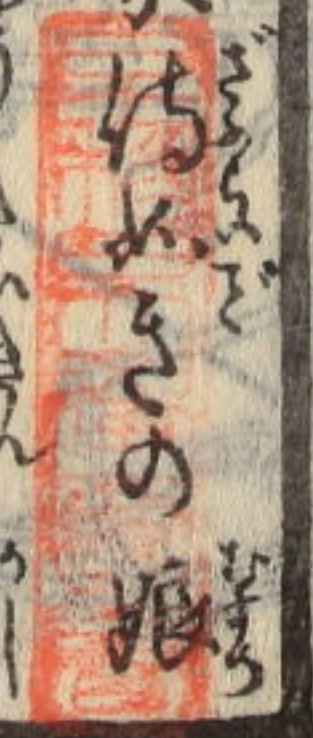
岡く小橋井中納を殿の侍屋圓へ左遷登表の石より是御  
 家基源八か母のくく小所のはし雅君侍屋の圓へ双抱し出  
 けり後には家父の供して幼ん小も縁用と配不の徳とそ  
 もりくく色に合ふ百兩計のく下さるべしぬ家事一日も  
 ありそ小方へあうくくれに供まをつは出途と結着と  
 の文符るく母家長大よ勢のさこいりかぬ事心か  
 る家もるき人と嫁よまひて何角せんあく縁と切よ  
 い志じとさぬぐく工まとまの小家長忠なる智恵と振い  
 出物侍屋の換留をく幸けらるにせ等小供のいそ  
 とつりくくけ方へ便らさるやうの仕方をくはさくは

清八は出物と一緒し寺屋一沙出物の跡よすく遠く子代  
 是よあつた書をきと家長素又してくは代清八よ  
 書せ家もあなるを各と指出源八小對面しても元は桃井  
 家の由家東ともは出物侍屋下さるくく系教道留の徒然  
 よ桃井の娘と戀しきりうて嫁をく小笑りん妻細い運り  
 よけりとの作らうと望より源八作夫してまのねの介乃  
 事侍屋の換留表下良と出物しゆけ増礼さぬぐんと  
 畫し五持一の能の事何よせよ侍屋はくは目よ  
 無りぬかーせおなる事出物と出下されよと花  
 よせてくくは忠なる物あひけ方の出物容易よと許



方のいふことし良しお人小あつては子くゆり多くとまはる  
く又罵る小浜八兵衛のん地してさむぐく侍たつて面会  
せん事を頼むも多くのも成るも一回小終よ八と門外  
一進出しつる源八途方よ言々るらうやくけあふ侍たつ  
及志美と書きまども素向惚れる事事るまじが家因と  
憚りてかく情を云せりふらんとな理と付てつるや  
るやたへゆり浪花の始末と後りあくも返るつと用さ見  
たつといふは花の井終るも用いんるよ侍たつらうはつ  
まらう一返るりの久待の源八つよよ遠るり系取進る中  
の侍終小とりと慰しるうけ方よは挽屋久と清といふ

人の妹小吟といふまおづけらまこいふてる家持めこの娘  
と嫁よせんはよく思ひきつめ人まして式百あめの大令と信  
中さんけはあまを流るまじくいと書くれは花の井いつ  
と叫んで地よ倒れまじし終入てりりるる懐叙抜持  
既よ月害と見えつれは人々大よ驚き押し先取園娘は  
まきて花の井よまらり射やよ花の井ねまやしよるんと  
静れよしとまじは花の井いつるる流る流と拂ひかたの書  
生のいふ人ともまらば幾も代りけて終る事の本や  
はよは日へおあつてあつてあつて今も侍たつらうの侍とや  
どせたりちあまはやく嫁入てまのいふまじよる





京五郎直宿之助  
を賢友の國



江崎麻平

聚養画棟  
末簾歳捲

外忌松金杏源

五五



源氏

夕霧卷之三



此代らんくえんせむやとふし甲斐もろく何とせの今  
西と公と人き共けまう小教してまらまことうと後くれい  
右もろくも後よるまらるが背く沈吟して某つくと  
思ふ只一夜而舎一つまらも存なう人抱く於不致と  
ゆめりのよりう次をよは子細もろくん殊よけ後係八が  
老母の女抱た勢の厄ぬと後果るも皆存なうが係八の  
一美金ありゆけ不致の者振枚の美金とろくん不  
死とる事ありまらと田まらかーん中とまらつてまら  
死とまらまらる

枕巻家荒み郎並宿と謀る話

枕巻家荒み郎の橋井中納言の嫁婿交替と深く憤り  
之山と傳らいつ但のま紙と次世中納言家とむらん  
小一年もまらへ家尋出らるやうなる橋井家と思  
と見せ再び飛とまら入ん中納言と整居の内いつて筒井へ  
嫁へらんけ恩と見せ筒井家と改家方一飛と連ん  
との得るりしと帝の運鱗まら中納言の左近将ハ  
ろくろくろく小蛇も蜂も血次らるらる並宿と助も鼻  
明しとせ先ての腹いせと思ひらるかくて筒井家  
併勢者仁まらと名と改入らして並宿と助も元服とせ  
併勢守らる上系とせ將軍ハ家督の由礼中とまら

枕巻家荒み郎

筒井家



ふと寄るゝぬいん膝くくして樂次明書娘のふのゝと恋  
 こづれけ度の上系も存なと石つる將軍家へ礼りと  
 らきこ一と我輝ふ山満と遊ぶの一字と終り存終り  
 守我雄と号一と礼へ威勢強目く一培り多りぞやし  
 くれ同トをぢるるゝ荒れ即の志一宣りくづれば將軍  
 その外もくくくく用ひがれば又く筒井が山茶徒と囁む  
 事日以ふ十倍して何れぞ彼とるきりのよせんとかは  
 ぐと又一とらぐ本日敵中ふて筒井又とくらのいそ下家  
 督源彼迄して銃矢も下り今晚へ事下りも某も  
 非妻る色は麻酒一献をよせん何れとて東原にまこり

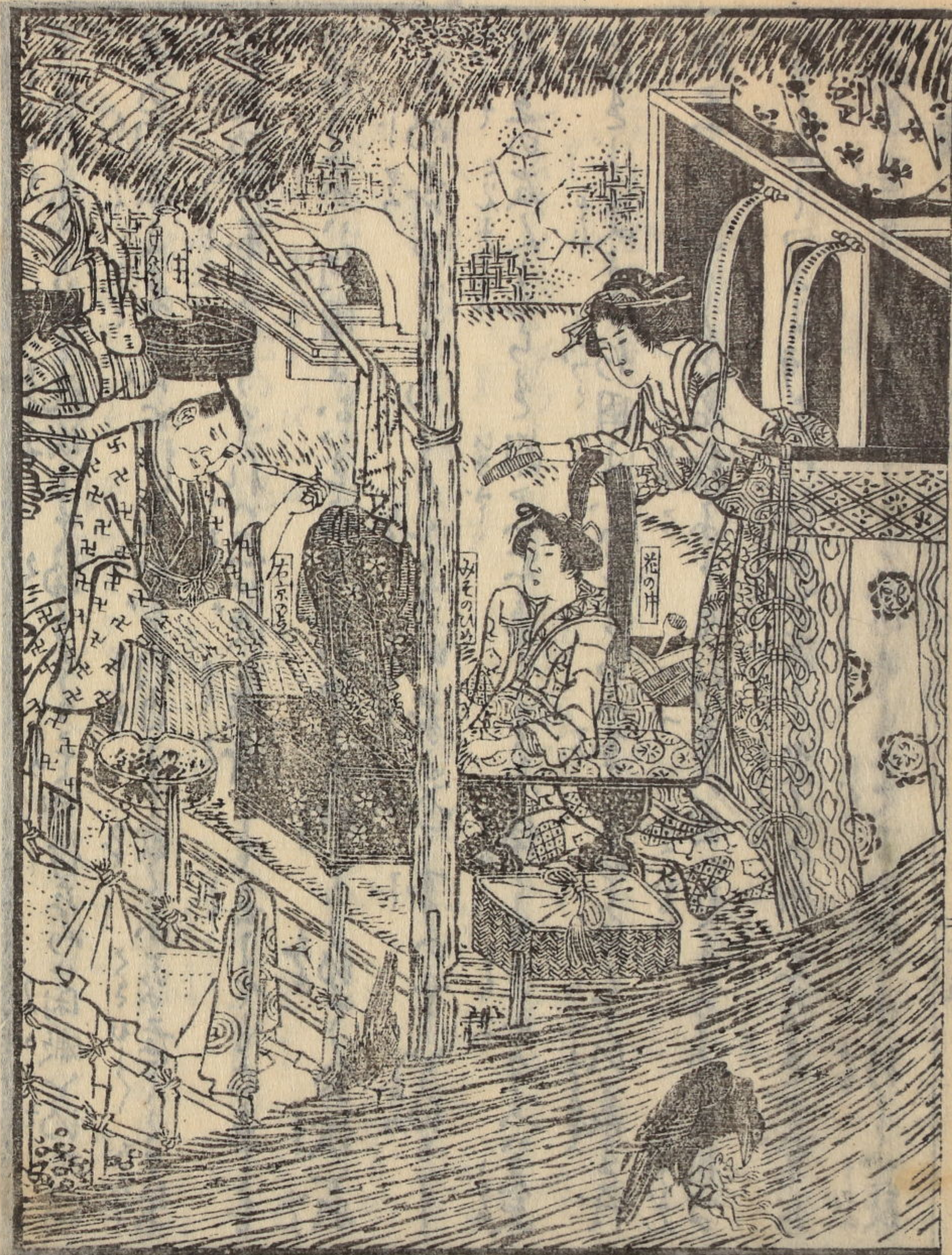
よと筒井へえ来酒とくくまがしも朋輩の事いろくく  
 ぬいん今晚山満をよびんと別きくれば存者も助はるお  
 又ゆりかくく事よて某も即方一振るはれも存なると  
 云々礼は存なると只花の井が事のくくまかるとく色は作る難  
 此も其の橋井家の娘某も大なるをくく方のと何方は  
 存しとくく名は存しとくくおれとくも某の山例あのとく  
 ん存しとくく今日山満めりく娘某の山例う家とくく某らせ  
 んとくくよと存者もぬいんも其もくくもくくもくくも  
 眼あぐききいん僅く色せりうくぬいんとくくもくくも  
 一の畏りけし存なるとく出さるり筒井へは本を服とくくもくく



の幸よふまは荒又郎大い収の能くそまうのひいと日ひも  
 他を酒肴と出さうやうは食食多飲されと重宿も下  
 るれは幸よふまは荒又郎の酒とのて今ハ不懶の能くそ  
 礼よふまは荒又郎の酒とのて今ハ不懶の能くそ  
 酒とまうの能くそ酒とのて今ハ不懶の能くそ  
 若くして酒子ハ酒と出さうやうは食食多飲されと重宿も下  
 とむげよせんもまは荒又郎の酒とのて今ハ不懶の能くそ  
 して酒よふまは荒又郎の酒とのて今ハ不懶の能くそ  
 のくろき汁らんや気麻疾と若くして酒子ハ酒と出さうやうは食食多飲されと重宿も下  
 も更なれは酒と出さうやうは食食多飲されと重宿も下

て又社系うりんと礼謝してゆるゆるそ日休なる閑暇とて様  
 井の門本よまは荒又郎の酒とのて今ハ不懶の能くそ  
 狐狸の住不しううれは思ひ次第漸して去りてもな事しを  
 のりう家ハ何國よまは荒又郎の酒とのて今ハ不懶の能くそ  
 いたる時所らうとあはれゆるゆるそ日休なる閑暇とて様  
 遊乞の友人まらまは荒又郎の酒とのて今ハ不懶の能くそ  
 若くして酒子ハ酒と出さうやうは食食多飲されと重宿も下  
 非天た系しを及款ふとも休むの國ハ起さうやうは食食多飲されと重宿も下  
 ういひしうは休むの國ハ起さうやうは食食多飲されと重宿も下  
 るし事らうな系しを花の井も定て酒と出さうやうは食食多飲されと重宿も下







正したる時いぞ故のうらよらんとかと落してゆき  
 同井車者之助麻痺よりしてに圭親子の義と終結  
 又より同井車者之助ハ若ふゆりうらうらと中らん地り  
 翌日も出勤せ次りうらうらと親身祭壇とせじ懐事志きりうら  
 へそと撥小はしい臍汁とせし款とも悪く班小種物のいふ  
 三日の中眉毛もども撥りじ安ももりうらうら次こい不出成と  
 さぬぐ療用とせりうらうらと一うらうら將軍一消へちへゆけ  
 るふに圭も大よ勢きとせりうらうら今令麻痺よ遠ひうけ  
 にま歌息して家家代ハ麻と痛の何もいふも親子親  
 親もそ成終して街に捨る例うら既よけん但後徳九と令邦

正捨一例り不便と思ひも先例よ何とせり又元の重者  
 助ふか一にま再び侍勢入ると号し政のうら収うらとせり  
 之照ハ初かうら例ようらうて厚恩忘れまらまやと捨る  
 一重者之助ハ麻痺ハ重者存在も是までハ厚恩報む  
 る為麻痺ハ初ハ徳醫よ見せしうらうて以本取らま事と  
 けまうらうらうら花ハ元條下きしうらうらと練まらも重者  
 うらハ吐瀉よむせむらとよ家ハ初悪疾よゆる事派  
 仏神の所悟とせし思へ作ら眼らん家是より後國の思は  
 社ハ後でかとも家罪の滅むらうらうらと終るうら今  
 てまうらうら招ハ家初かうらうらとらまは彼一人とせり



侍なつさぬぐといふといども更よ歩入る次毎毎のうらた、  
 比日より歌をよ洗くのみども家の格をよび冷た方より曲を  
 助がせのどく法四渡りして病来平念せはあつてゆき  
 よく美令百支とる玉腰は流しつゝに車も流る恩をの流  
 よく是くも曲を看る助先西國唯礼せんとりうらうの小侍なれせ  
 りて浪花までいれ侍せんと三人旅の衣物も流るるを  
 とおし舞う玉腰甲斐なくしく守護し玉出さばお友親の歌を  
 ばも更なりまよりい大和の内は美場も礼と納免浪花へ出  
 めへの侍なつさぬぐ面るといふども夜屋へい玉あつた次侍なつ  
 よ引ふもはの園熱持寺勝庵寺へか堂のうらそりれあはれを

今く美を所が悉計上流入のふそ是非もろき

花の井身と賣てま人と侍を園へ遊ん所信

相も此前作の一日もあつ侍を園へ約て父の令の女抱せんと  
 ん斗いせきさのうらも猿の用をよまき金かうらべんあつ次  
 源はら母のえよおいさるうら花の井の月満て玉のどくき  
 せりつひるるたるあつをい不流の侍ならが格うらべ小よあせ  
 よくさぬぐといふといども花の井の文引を思ふ子細のわい  
 是沖の父上の作と宵きゆりうらとつゝは源八も侍る小座  
 へ流し念しき業るうら大切の由身は怪家なりつていさぐとし  
 と歌ふの詞と探してとむら小たあつをよとんきいの中よ



娘よちやまらうそてもらうふけよのたふあうと終よ安産しと  
まらうささまで存たわづ涼八よあうそ一も今も涼かよあうな  
り娘よ目々父の事と云ふに泣く人の花の井に怒りて  
とり垂し父の事よ出てかくりままでけ不よたはまとも仕出  
る事もちく老母の娘よ今も今あうるれはあうままで  
嫁死まると納まうりお侍るぬ家父よ上敷と申し八自で何をも  
傾城小賣のひを金とりので娘よ父上熱海へ出越りて  
家来の女抱りて一け児の老母よ親を浪花へ寄と賣ん  
と思ふらうたわるとまよひ存たわら及よあうる合まき物すも  
何ら次年月の恨と只一まいも死まるとも本をあらん

此へ由室の給成も徳人の入也不るまはま出ま事も徳らん  
家身一りして三方四方の足達まらふらむとと理法を正しく  
まらふはたまをくを清教のなひ流るゝ家娘らるそや能  
もん附らうけよ二とよもま次汝が教と親がまらそとま  
もらひはまらんと泣くまは娘よをまらうひのまよ花の  
井も方ハあうかき見とらう捨て初んとらん強し父上の言ま  
らハ自らそらき川竹の節もせんたまをいそ金を  
りて父上の女抱りて入とまらへ花の井にわらと合ま  
娘よと傾城と申しまら親子安産とそ今よりらと  
まらへあう家来へ何と申しんか泣きをまらいてまら

一三三



日向自書してあけ世の若とまぬらんと思ひ侍る氣  
 なるに源八老母信も花の井がんとおし作つて心志を  
 了らるる令と心外いけぬふいけ姥がりうそ風も引せしはじ  
 必ぞく心氣をいりるまじ御室の吟歌うらう浪花雨瓶  
 何るも直しうらんと源八老も幼き色ハ娘君も理し侍  
 泣くより外いかに源八老を静るそまで京よのこひひて  
 浪花よ知老とていりうざれども日外茶屋へあるおろく  
 船中よて八十番吉年とち角力ぬよと付しお不書と  
 もりて今よ不おつとそそふとよりて新町に忘八を  
 一所の付り入舟のてくを頼まやさんと乞より垂し浪

花へあり何と老たれとらんと思ふは花の井はいとまめ  
 くく心とありゆきと深よくきて門たくり世  
 んろくもいらいりもれあり

夕霧書替文章卷之二



本井子承著

長命衛生論

全部三冊

此書八人問一生は養生して長命とて道理をきき  
 子孫永又収身齊家とて傳漢の事り代奉多誠灸浴とて  
 心得酒氣色慎堪患の辨食物冷合諸毒消大酒の并に合房  
 子小然も補益の傳都て天理自然の理り國字ふまて  
 思事りていりやとて学文せりて収身齊家とて長命  
 捷徑は書なり



